



Die Eiche ティ・アイヘ

Japanisch-Deutsche Gesellschaft in der Präfektur Chiba

事務局 〒274-0822 船橋市飯山満町 2-681 ワールドナースィングホーム内

Phone: 047-467-6111 Fax: 047-467-6123

「ドイツに親しむ3日間」開催

実行委員長 橋口昭八



テープカット

「日本におけるドイツ 2005/2006」協賛行事、千葉県日独協会主催「ドイツに親しむ3日間」は、1年半余りの準備期間を経て、秋晴れに恵まれた10月20日に開幕。13:00に千葉大学けやき会館前で、フィッシャー公使、中沢千葉県理事、木村日独協会副会長、新倉千葉大国際教育開発センター副センター長、平尾当協会会長によるテープカット、続いて会館ロビーでの千葉大学カルテットによるドイツ国歌、君が代演奏で「ドイツに親しむ3日間」がスタート。このイベントは、来場者に先ず写真と

資料で千葉県各地のドイツとの交流状況を紹介して、ドイツを身近に感じてもらい、更には講演・音楽・映画・観光案内などを通じて一層ドイツに親しんでもらおうという狙いで実施されたが、講演では第1日目平尾会長の「ロマンチック街道はじまるどころ」が、ドイツ紹介の導入部として大変楽しく、「正にドイツを旅しているような感じでした」((財)日独協会石川嘉一氏)との感想をいただいた。NRW ジャパン ベッカー社長の「最近のドイツ事情」は、ドイツの現状と問題点を指摘、第3日目の子安美知子氏の「あしたの国のまちづくりとシュタイナー学校」は、同校卒業のマイケさんと共に、シュタイナー学校の教育法を詳しく紹介。更に、ドイツ側からの強い要請により急遽同日9時より1時間半にわたり行われた、ドイツ環境省ザッハ博士の講演も時機に合ったものであった。又、音楽では第1日目、フライブルク国立音楽大学大学院の Solisten 課程を首席で修了した会員の高橋麻里子さんが素晴らしいピアノ演奏を披露、花束の他にベッカー社長よりドイツ年のマスコット、DIE MAUS が贈呈された。第3日目のチター演奏では、日本チター協会会長の内藤先生が門下生 10人と共に優しい音色を会場に響かせ、来賓の東山すみ夫人も熱心に聞き入っておられた。一緒に出演された千葉大卒の熱田健氏もアコーディオンの新倉恵さんの伴奏で、本場顔負けのヨーデルを熱唱して会場を沸かせた。映画では「橋」「グッバイ・レーニン」が2度ずつ上映されたが後者は、第2日目、千葉大学主体の日独学生シンポ「壁」と共に、ドイツ統一後の「壁」についての問題を提起。結局、3日間の入場者数は招待者約 60名と御宿町からバスで来られた 20名の皆さんを初めとして延べ 1,000人、動員されたボランティアは、船橋市加藤歯科の加藤和子先生(理事)他職員6名の皆さん、元御宿町長の伊藤治昌理事、船橋市民大学有志 8名ら 120余名、千葉テレビの取材も受けて、先ずは成功裏に終了。なお、当協会名誉会員で衆議院議員白井日出男氏秘書貴嶋美知子氏(長女)、また(財)日独協会の花井常務理事、更にはぐんま日独協会平形会長にお越し頂き、とちぎ日独協会の橋本会長からは祝電を頂戴しました。厚く御礼申し上げます。最後に財政面では、当協会承認分 50万円にドイツ大使館助成金約 34万円、合計 84万円の予算に対し、各後援者の協力により、実際の支出は 74万円強で当協会支出分は約 40万円であった。

「ドイツに親しむ三日間」 特集 1

宴のあと

会長 平尾浩三

ドイツ政府による「日本におけるドイツ年」に協賛する事業として、千葉県日独協会の為すべきことは何か？これが論議され始めたとき、私たちがまず得た共通の認識は、虚しき狂乱はやめようということである。ささやかな友好グループであるわが協会が、浮かれて、やたらと大きな花火を打ち上げるのは、意味なき所業であろう。むしろ私たちの背丈相応の、無理のないスケールで、しかも千葉県日独協会ならではのといったことを試みられまいか？地味であっても、千葉県の大地に根ざし、将来に向かってしつとりとした潤いを、ずっしりとした稔りをもたらすような催しは、実現できまいか？.....『ドイツに親しむ三日間』と題して私たちの持った講演会・日独討論会・演奏会・ドイツ映画上映会や資料展「ドイツと千葉県」(10月20日—22日、於 千葉大学けやき会館)は、そのような考えに発するものであった。

小さな団体、千葉県日独協会の力で、なんらかの盛り上がり、果たして期待できるのか？準備始めには不安があった。しかしそれは杞憂なることが、やがて感じられる。日頃は高貴なる個人主義に徹しておられる会員諸氏、作業がスタートするや実に手際よく、協力態勢を見事に作って、難事を次々と片付けて行かれる。次第に熱気を孕んでくる会合に出席しながら、私はただ見惚れているのみであった。

そして会長としての私など、実は不要の存在であることも判明した。村祭りを見ていると、皆が御輿を担いでいるのに、その屋根の上でやたらとウチワを振りながら「押したあ、押したあ」と叫んでいるオニイサンが、きまって一人いるものである。どう見ても役に立たない人なのだが、取り柄と言えば、終始オメタイ顔をしていることである。今回のイベントにおいて私の果たした役割は、まさにこれであった。会員の皆様、ほんとうにご苦労様!!!

ともかく無事に終わった。好評で、来訪者も予想以上に多く、十分な成功を取めたと言えよう。私自身この行事を通じて、千葉県の方がたとドイツとの間に如何なる関係が結ばれているのかを知ったし、また会員の皆様と、いっそう深く気心を通ずる仲となることができた。時あたかも、千葉県日独協会は創立10年を迎える。わが協会に具わる地力に自信を抱き、来たるべき時代に即応して、私たちは、新たな活動に踏み出さねばならぬ。「宴のあと」の感慨にふけると、私たちは「宴のまえ」に位置するのである。

そしてあらためて：今回の催しに物心両面のご援助をくださったドイツ大使館に対しては申すまでもなく、共催者の千葉大学、ご後援を賜った千葉県、(財)日独協会、そしてご協力くださった諸団体に対して、ここに心から御礼申し上げます。



演奏する高橋さん



チター演奏者の皆さん(後列中央内藤先生)